

ねじりはちまき

8月 葉月^{はづき} 立秋 処暑の月になりました。

8月8日 立秋、11日 山の日、13日 迎え盆、23日 処暑となっております。お盆ですね。祖霊をもてなす盆柵、先祖柵とも呼ばれます。家に迎え入れた先祖の霊は仏壇ではなく、この盆柵に祀ります。盆柵は13日の朝、仏壇の前や縁側などに設けます。昔は真菰で編んだゴザを敷き、四隅に笹竹を立てて縄を張りほおずきなどをつづって作られました。お盆の最後の日(15日又は16日)には先祖の霊が無事にあの世に戻れますよう迎え火と同じ場所で、送り火を焚きます。地域によっては町村全体でかがり火を焚くところもあります。あの有名な京都の五山の送り火(大文字)も、その送り火の一つです。

毎日暑いですね。お盆が過ぎると涼しくなります。もう少しですので頑張ります。

幸田常一

<会社近況>

暑さが命に直結するくらい高温な日が続きますね。外での作業や、暑い屋内では熱中症に配慮しながら作業を進めていかないと、急に具合が悪くなったりしますので注意が必要です。ただいま、現場は本宮市の修繕工事、郡山市の現場をお世話になっております。

【木の知識シリーズ】 🌳 <ひのき>

ひのきは建築材として世界最高レベルだそうです。スギに次いで多く植林されている樹種で、加工がしやすく、ひのきのよい香りを発することでも優れているようです。ヒノキチオールという成分に抗菌作用があることから、お風呂や水場にも使用されることが多いです。伐採後、200年は強くなり1000年かけてゆっくり弱くなるそうです。



<夏季休業のおしらせ>

誠に勝手ながら、下記の期間を夏季休業とさせていただきます。

8月11日(金)～8月15日(火)

8月16日(水)より通常営業となります。夏季休業中はご不便をおかけいたしますが、何卒ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

令和5年8月5日発行

<発行責任者>幸田久美

有限会社 幸田建設

969-1204 本宮市糠沢字八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記> 暑さが災害級です。台風や、ゲリラ豪雨などが頻繁におきる時期ですので、防災減災の準備が必要になってきます。命に直結するモノとココロづもりは用意しておきたいものです。

(ほしの)

今回は縁起物について取り上げたい。我が家にも、親の代から縁起物である七福神、大黒様、達磨などが飾ってある。それがあるとなんとなく落ち着くというか安心感が伴うものである。縁起物を求めるということは、人それぞれ願い事があることであろう。例えば、福島市飯坂町の西根神社境内にある高畑天満宮の「うそかえ祭」(1月)では、木彫りの縁起物「鶯鳥(うそどり)」を買い求める参拝客で賑わうという。「鶯鳥」は災いを身代わりになって「うそ」に替え、授かった人は1年間の幸福が得られると言われる。そこで毎年新しい「鶯鳥」と交換する習わしがあるというのである。この「うそかえ祭」は「災いを転じて福となす」というもので、生き方としてはなかなか前向きと言えらると思う。

縁起物という一般的なには、五穀豊穰、大漁追福、商売繁盛、家内安全、無病息災、安寧長寿、夫婦円満、子孫繁栄、招福祈願、厄除祈願などの願いごとが込められていると言われる。そしてそれは「市(いち)」や「縁日」、そして「祭礼」で求める人に授与・販売される。その賑わいの雰囲気、自分一人でない安心感を与えるから妙なものである。

では、縁起物の由緒などについて、我が家のものから触れてみたい。まず、七福神である。七福神はご案内の通り、福をもたらず神として信仰される七柱の神様、即ち大黒天・毘沙門天・恵比寿天・寿老人・福祿寿・弁財天・布袋尊の総称である。「七難を消滅すれば、七福が生ずる」という仏教の教えから「七」を重んじるようになったといわれる。七福神の信仰は、庶民性に合致するものとして室町時代の末頃より普及し始め、特に農民、漁民の間に広まっていったもので、現代にまで長い間生き続けている。七柱の神は皆笑顔で親しみやすい縁起物である。相手方の幸福招来を記念する贈答用にも使えるものでもある。

次は大黒様である。七福神の大黒天である。大黒天の起源は、インド密教・ヒンドゥー教のシウ"ァ神のマハカーラ(大黒天)にあり、中国ではその性格のうち、財福を強調して祀られたものが密教とともに日本に伝えられた。面白いのは日本での変遷である。大黒天の本来の偉容は黒色で憤怒の相(伝来のまま)で表現されていたが、これは鎌倉期までである。これがいつしか日本神話の「大国主命」と習合したのである。そして室町期以降は現在のような柔和な相でつくられるようになり、「大黒様」となる。さらに江戸期になると米俵に乗る偉容となり、現在は米俵に乗り、福袋と打ち出の小槌を持った微笑の長者形で表現されている。まさに財福を招来する福の神である。大黒柱も大黒様と関連があるようだ。

次は達磨(だるま)である。達磨の由来は、禅宗開祖の達磨大師がモデルである。達磨大師はインドの王子として生まれ、国内で仏教を広め、その後中国に渡り壁に向かって9年間座禅を組む修行を続けた結果、手足が腐ってしまったという伝説が残っている。それが達磨には手足が無い理由である。達磨大師の教えは鎌倉期に禅宗として日本に伝えられて広まるが、その中で達磨大師の姿に因んだ手足のない人形や置物が作られるようになり、それが達磨の始まりといわれる。それが室町期になると、丸みをつけた底辺に重りを入れて重心を低くすることで、倒そうとしても起き上がるように作られる。つまり達磨が「起き上がり小法師」のスタイルまでになる。達磨大師の「面壁9年」の不屈の精神を表そうとしたものと思える。現在の達磨のスタイルになるのは江戸期になってからである。顔も達磨大師をイメージしたものとし、色も赤が基調として使われた。赤は祝い事の時に使われており、「魔除け」にもなるとされていた。また、紅白も祝い事を表わすことから白色の達磨も登場する。現代では様々な色のものがあるとのこと。そして達磨という存在は、願い事を叶えてくれる縁起物となっているのだ。誠に変われば変わるものである。願い事との関係でいえば、通常達磨は目が入ってない状態で売られ、購入した人が先ず願いを込めて左目に目を入れる。そして願いが叶ったら右目に目を入れる、ということになっている。

県内の達磨を見てみよう。県内の達磨で伝統があるのは、福島だるまと白河だるまでである。福島だるまは、江戸時代後期から約150年に亘り制作されてきた。睨みつけて悪魔を退治し、福を呼ぶという縁起物である。その縁起の睨みを効かせるために最初から目が入っているのが特徴である。白河だるまは江戸時代中期に藩主松平定信が絵師谷文晁に考案させたのが始まりとされる。あごひげの長いのが特徴。厄除けと家内安全の利益がある赤だるまと開運のある白だるまが作られている。最近新しい取り組みがなされているようだ。県内にはいくつかの「だるま市」が開かれる。一つは「双葉町だるま市」で、1月上旬である。二つ目は「三春だるま市」で、1月の第3日曜日である。三春だるまは、高柴デコ屋敷で作られており、高柴だるまともいわれる。三つ目は「白河だるま市」で、2月11日である。白河だるま市は300年の歴史をもつもので特に有名である。

ここで付け加えると、達磨の歴史の中で触れた「起き上がり小法師」であるが、これについては現在でも会津若松で作られており、人気がある。我が家でも買って置いてある。

次に「酉（とり）の市」の話である。11月になると「酉の市」が開かれるところ（浅草など）がある。そこでは「熊手」や「招き猫」の縁起物が売られる。熊手は、その形が鷲（わし）が獲物をつかんでいる様子に似ていることから「福をつかんで離さない」という意味や、落ち葉などをかき集めることから「福をかき集める」という意味があるとされている。熊手には魚の鯛（めでたい）も添えられている。招き猫は、右手を挙げている招き猫は金運を招くという意味があり、左手を挙げている招き猫は人脈を招くという意味があるとされる。このように酉の市は、開運招福、商売繁盛を祈願する祭りなのである。

それと、夫婦円満・長寿を願う縁起物として「高砂人形」がある。この人形は、白髪になる歳まで一緒にいるということを意味する。「お前百まで（掃くまで）、わしゃ九十九まで（熊で）」と、それぞれの手に熊手（福をかき集める＝財運）と箒（邪気を振り払う＝魔除け）を持たせ、夫婦共に助け合い、長寿を全うすることを願うというもの。

ここで大震災後の登場した縁起物を紹介したい。それは宮城県南三陸町で作られている「オクトパス」である。同町は日本でも有数のタコの産地である。その「タコ」と「置くとパス（合格）」を掛けて、試験合格の縁起タコの置物を作ったという次第。なかなかのアイデアである。被災地においてこのような取り組みがなされているのは素晴らしい。オクトパスを求めた人の合格と大震災被災地の復興と、双方の幸せを願うプロジェクトと言えよう。

最後に、「縁起（験）を担ぐ」という言葉を取り上げたい。この言葉を「縁起を気にし過ぎる」という意味で消極的に捉える向きもあるが、一方「縁起を担いで、前向きに生きよう」という積極的に捉える方がいいと思う。現状が悪い、暗い状況下であろうとも、いつまでもグチグチしているのではなく、そこから脱しようとする気持ちの表現として、縁起を担ぐのは良いことだと思う。自分も長い人生の過程でいろんなことがあったが、「必ず良くなる」と信じて、良い意味で「縁起を担い」できたのではないかと思う。

今回はこれで終わりとする。

前向きに 明るく 希望を捨てずに 七転び八起き 縁起物に賭けた思い

縁起を担ぐ：大安・仏滅 方角 七五三

炎天下の 谷川岳向かい 上州朝日岳

(百：日本百名山、◎：日本二百名山、○：日本三百名山。カッコ内の数字は標高)

【今回登った山】

朝日岳 (○、あさひだけ、1945m、群馬県みなかみ町、百名山谷川岳 (1977m、※) 向かい)

この山は2016年11月初旬に登ろうとして、前日 JR 上越線土合 (どあい) 駅近くの土合橋駐車場に車中泊し、当日 6 時に出発したが 1 時間位登ったところから積雪になり、白毛門 (しらがもん 1720m) から引き返した山だ。それ以降気にはなっていたが行けないうでいた。

全国に朝日岳と名のつく山は多い、上州朝日岳とも呼ばれる。

※自分は昔、近所の人達と 4 人で土合駅前の民宿土合ハウス (今はなくなっていた) に泊まり、翌日、女性 2 人はロープウェイを使って天神尾根を、自分と先輩男性は、多分西黒尾根を登り谷川岳に至った。(3 頁上の写真の左側の尾根?)。

【日程概要】

7 月 15 日 (土) 移動(本宮 IC～関越道水上 IC)、土合橋駐車場で車中泊。

16 日 (日) 朝日岳登山。みなかみ町に住むかつての同僚宅訪問。移動、(関越道月夜野 IC～本宮 IC)。帰宅。

7 月 15 日 (土)

13:40、自宅発 雨。本宮 IC から東北道、北関東道、関越道、を乗り継ぐ。那須高原あたりから雲が薄くなり雨が上がりさわやかになっていく。前橋付近では日差しが出てきた。駒寄 PA 付近で車両運搬車同士の追突事故があり渋滞する。ラジオでは引切り無しに北東北・秋田の大雨の情報を流している。

水上 IC17 時前着。「ようこそ水上温泉郷」の大きな看板に迎えられた。コンビニで買い物し土合駅に向かう。途中、谷川岳の双耳峰が見えるところがあった。

17:30、JR 上越線土合 (どあい) 駅着 (写真下左)。入口に「ようこそ日本一のモグラえき 土合へ」の看板がある (写真下右)。下りホームは登りホームのある駅舎から約 70m の地下、462 段の階段を下りたところにある。



谷川岳登山の紀行文や小説などに登場する駅で、いつか下りホームに降りてみたいと思っているが、いまだ達成できていない。下山してから試してみたいと思うが……。

17:45 登山口土合橋駐車場着。10台の車があった。意外と少なく感じた。仮設のトイレ近くに車を止め蚊取り線香を焚く。テントを張っているグループもいた。

持参のおにぎりをキュウリ味噌で食べる。生ハム、ミートボールなど、明日のために普段よりも量を多く食べる。日が暮れても温度は高く半そででも十分だ。夜から翌朝までにかかなりの車がやってきた。



この駐車場は谷川連峰馬蹄形縦走(※)の人達も利用する。※馬の蹄(ひづめ)を描くように回るコース。10座、歩行距離約25km、時計回りコース、反時計回りコースがある。

16日(日)

3:15、目覚める。周囲がざわめいている。皆ヘッドランプを着けて準備をしている。谷川岳方面に行くグループもいた。

4:15 ランプを着けて出発する。駐車場を抜けて少し下り、沢に懸かる橋を渡ると登山道の標識が立っている。急斜面のジグザグの道を登る(上の写真中央の山を登って行く)。明るくなりヘッドランプを消す。尾根に出るが樹林帯の中で視界はきかない。いくつかのグループに道を譲り、ガレ場や鎖場を経て7:50 白毛門(しらがもん 1720m) 山頂に着く。



ここまで約3時間半。7年前は積雪のためここから引き返した(写真左)。

360度の展望だ。深い谷の対岸の谷川岳(写真次頁上)の雄姿に圧倒される。雪渓が残っているところが一の倉沢で、過去に

多くの遭難者を出したところでもある。

白毛門、ここからが今回の本番だ。朝日岳山頂はほぼ真北に位置するが大烏帽子(1934m)、小烏帽子などの陰になって山頂は見えない。上の写真の左のピークが笠ヶ岳(1852m)、標柱の奥が朝日岳山頂方向。



炎天下、遮るもののないほぼ稜線上を歩く。笠ヶ岳 9:05 着。

笠ヶ岳先の鞍部にニッコウキスゲがたくさん咲いていた（写真下）。



山頂まではここからが遠かった。自分を追い抜いて行った人たちが下山してきてすれ違う。もう少しです、頑張ってくださいなどと声を掛けられる。いくつかのピークを越えて 10:48 朝日岳山頂着。スタートから 6 時間半を要した。

山頂には二等三角点と石の祠（写真次頁上）があった。至仏山（百 2228m）や燧ヶ岳（百 2356m）などの尾瀬の山々、武尊山（ほたかさん百 2158m）、越後駒ヶ岳（百 2003m）や中ノ岳（◎2085m）などの越後の山々も良く見えた。

休んでいると単独行の若い女性がやってきた。馬蹄形縦走（反時計回り）で少し休んだだけで清水峠（谷川岳との中間点）の方に下って行った。社にお参りする。しばらくすると清水峠から若い男性がやってきた。土合のロープウェイ駐車場



から谷川岳に登り朝日岳まで8時間かかったという。逆算すると3時にスタートしたことになる。馬蹄形縦走(時計回り)を日帰りで一周することになる。驚異的だ。谷川岳をバックに写真を撮って貰う(写真下)。雲が増えてきているようだ。



11:23、下山開始。
笠ヶ岳で休憩し、朝日岳山頂方向を振り返る(写真下)。



白毛門 13:55 着。長めの休憩をとる。

若い女性が一人登ってきた。5時間半かかったとのこと。今回は初めてなのでここまで帰るとのこと。連れの友人を待っている様子。暑い、一雨欲しいくらいですねと言っていた。白毛門から自分と一緒に下り始めたら若い女性が登って来て、彼女は友人と一緒に白毛門に登り返した。

白毛門直下の岩場を慎重に下る。樹林帯に入ってから若者男性が一人歩いていた。疲れているようだ。今回人を追い抜くのは初めてだ。15時ごろ西側の谷川岳方面から黒い雲が流れてきて、弱い雨風になった。心地よいがカッパを着けると暑い。30分くらいで止んでよかった。丁度1年前、長い下りで雨に降られ

た富山県の毛勝山 (◎2415m) の下山時を思い出したが、今回は道の濡れもさほどではなく転ぶことはなかった。毛勝山の時は自分の後ろは誰もいなかったが、今回は若者が3人いるので安心だ。

17:15、土合橋駐車場着。13時間の山行を無事終える。うち半分以上は遮るもののない稜線上の炎天下の山行だった。

駐車場は翌日も休日なので昨日よりは車が多かった。

今回の山行の目的は別にもう一つあった。2011年3月の東日本大震災時に南相馬に勤務していた当時に一緒に働いていた双葉地方の同僚が、原発災害によって避難を余儀なくされたときに、息子さんの住む群馬県のみなかみ町に避難していたことだ。

2016年11月、白毛門山行までで、朝日岳まで登れなかった時にも立ち寄ったが、年賀状の交換のみで元気に暮らしているか気になっていた。朝日岳山行の時にまた寄ることを約束していたが6年以上の時を経てしまった。

突然電話して立ち寄り、驚かれたが奥さんともども元気な姿を見て安心した。お土産に福島県の地酒を持参した。前もって連絡してくれればゆっくり話せたのと言われたが、自分の第1の目的は朝日岳登頂なので、あらかじめ連絡などすれば登頂の気持ちが萎えてしまうことを恐れた。

今度は観光においでくださいと誘われたが、お互いに元気で過ごしましようと言ってお別れした。群馬県みなかみ町に来るのはおそらくこれが最後になるだろうと思った。名残惜しかったが、帰宅の途に就く。

途中関越道は前橋付近から雷と大雨になり、北関東道にかけてワイパーを最大にしてもはけきれないほどの激しい雨になった。何とか見える右側の車線(破線)に注意しながら時速40km~50km以下で走行する。それでも追い越していく車がいた。大丈夫かなと心配してしまう。PAにも寄れず、雨が少し弱くなった北関東道出流原PAで休憩し東北道に至る。

途中で雨が止み22時過ぎ自宅着。往復600km、上州朝日岳山行を無事終える。ビールで一人祝杯を挙げたが飲み干さないうちに居眠りし寝床に就く。翌日妻にビールが缶に残っていたよと言われた。

日本三百名山残り17山。一つずつ登っていきたい。

令和5年7月 NO118 アンチ・エイジング 山旅遊人